



野菜の楽しさに、訪れたいくなるまち。

深谷市は、野菜をどこよりも楽しめる場所へ。

人を惹きつける野菜や農業の新たな価値が、あちこちで生産・発信されます。

深谷市 産業振興部 産業ブランド推進室

電話 048-571-1211(代表)
Email f-brand@city.fukaya.saitama.jp

デジタルテーマパーク 深谷

VEGETABLE THEME PARK FUKAYA

深谷市

野菜を楽しむまちづくり戦略

CONCEPT BOOK

デジタルテーマパーク つかや

VEGETABLE THEME PARK FUKAYA

この地を訪れば、
野菜の美味しさはもちろん、
ひとつひとつの野菜に込められた物語まで
味わうことができる。
作り手のこだわりや人柄に触れながら、
農業の楽しさを体験することもできる。

知ること、味わうことで、
体験することで、買うことで、
野菜は、農業は、最高のレジャーになる。
その楽しさを求めて、何度でも。
まちに、畑に、今日も人が集まる。

深谷市は、ベジタブルテーマパークへ。
新たなまちづくりが始まります。



気軽に、何度でも。

車でも電車でも、ふらっと行ける。

深谷市って、東京はもちろん、他の関東の人にとっても足を伸ばしやすい「ちょうどいいところ」にあるんです。

日帰り観光もよし、立ち寄り観光もよし。

他の観光地に行くときの拠点にもなれる。

100人の1度より、1人が何度も来てくれることの方が大切になってくるこれからの観光産業にとって

「気軽に行ける」って、実はすごいポテンシャルなんです。



深谷市は、野菜のまち。

深谷市といったら、やっぱりネギ。

深谷ねぎは有名ブランドで、生産量も日本一。

でも、すごいのは、ネギだけじゃないんです。

ブロッコリーやきゅうりの生産量だって全国2位。

他にも、スイートコーン、ほうれん草、なす…

野菜全体でみても、その産出額は全国6位。(※1)

肥沃な土地やお日様のチカラに恵まれた深谷市って、

実は全国有数の「野菜のまち」なんです。



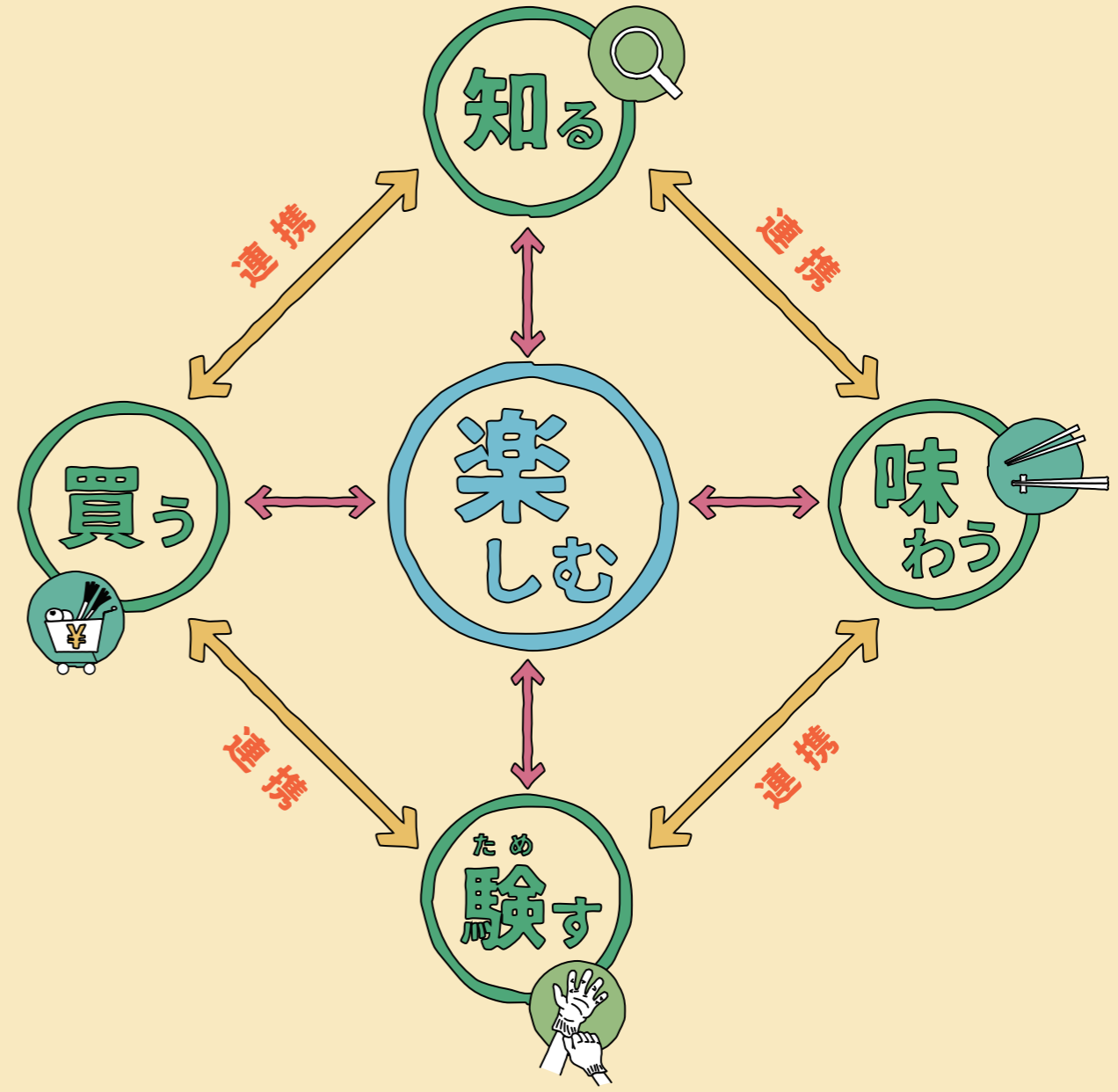
(※1) 出典：e-Stat 平成29年全国の市町村別農業産出額（推計）統計表より

野菜って、楽しい。

人が訪れたいくなる場所には、
「食」「自然」「文化」があるとされています。

野菜には、そのすべてが詰まっているし、しかも「旬」もある。
さまざまな魅力を、季節ごとに味わうことができるのだから
何度訪れても、飽きるわけがありませんよね。

野菜が持つ人を惹きつける価値を、
見出し、育てて、発信していく。
深谷市は、どこよりも野菜を楽しめるまちになります。



野菜の「楽しさ」を、知る・味わう・験す・買うの4つの切り口で開拓していきます。

野菜って、楽しい。

知る🔍



野菜は優良コンテンツ。

野菜には、物語やキャラクターがある。

農業には、知恵や知識が詰まっている。

食欲だけではなく、好奇心をも満たす。

人にとって、人生にとって、いい栄養がたくさん。

野菜は今の時代に必要なコンテンツ。

味わう🍴



ずるい美味しさ。

たとえば、採れたてをかじる。

作り手にとっては、ただの味見かもしれない。

でも、それが、すごく羨ましかったりする。

都会のレストランでは食べられない、

「これがいちばん美味いんだ」を、人は求める。

野菜って、楽しい。

ため
験す



畑はコトも生産できる。

朝靄の中、土の温度や緑の匂いを感じながら、

迎える朝日の美しさ、気持ち良さ。

畑という場所は、野菜という「モノ」だけではなく

感動の景色や素敵な思い出など、

ゲストが体験したい「コト」を生産することもできる。

買う



だから、買いたい。

自分のこだわりや趣味趣向を表現したい。

その旅の思い出を、カタチとして残したい。

買いたくなる理由は「美味しい」以外にもいろいろ。

いいモノを見つけた。いいモノを買えた。

買う楽しさも、あちこちにデザインしていく。

野菜を楽しめるまちづくりへの挑戦（取組イメージ）



旬を味わう、畑のレストラン。

たとえば、旬の野菜を畑の中で楽しめるレストランをオープン。採れたてのみずみずしい野菜を青空の下で味わうランチなど、都会では経験できない生産地ならではの野菜の楽しみ方は贅沢で美味しいコンテンツになります。



五感で楽しむ、屋外シアター。

たとえば、畑を会場にしたナイトマーケットで買った野菜、深谷市に豊富にある田畑が、生産地も観光客も

屋外シアターで上映会を開催。スティックをお供に、映画を楽しむ。人を集める場として機能することで楽しい時間を共有できます。



生産者や野菜を深掘りするメディア。

たとえば、深谷市の生産者の方にインタビューして、コンテンツに。作り手の想いやメッセージを発信したり、産地だからこそ知る野菜の美味しい食べ方を広めたり。アプリやARと連携すれば、観光ガイドにもなります。